

山小屋と海小屋の話

西1区

山嶋哲盛(昭和25年生)

(有松医科歯科クリニック)

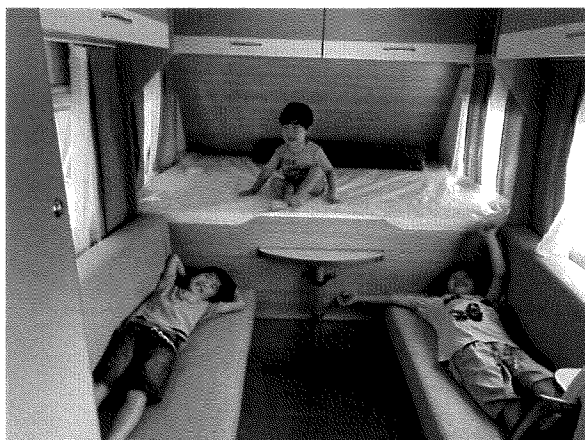
40年前、留学先のドイツ・ゲッチンゲンでは大学スタッフは午後4時になるとサッサと帰るし、週末は誰も出て来ない。キャンピングトレーラで人生を謳歌するドイツ人をたくさん見た。一方、金沢に戻ってからの自分は週末も仕事をし、日曜の夕方になってからやっと子供の遊び相手をし、奥様のご機嫌伺いをする仕末。50歳になっても趣味なしで、こんな人生で良いのかなと危機感を感じ始めた。その頃から、別荘探しが始まった。3月のある朝、湯涌の銭亀温泉につかっていると、おっさんが観光客に自慢をしている。「わしゃ、奥医王山の中腹にロッジを建てて、山菜と自然薯を取って生計を立てている。湧き水はうまいし、日本海に沈む夕陽も格別や！」

「そんなにいい所なら、一度見に行つていい？」と、頃合いを見て私の方が関心を示した。「ああ、いつでも、おいで」それが、始まりだった。雪解けを待って訪ねると、熱燗入りのコップを片手に昭和38年に廃村となった栃尾集落の昔話をとくと語った。再訪すると、「ジャガイモを植えるのにいい時期や。余ったのがあるから、あんたらも植えてゆくまっし」これが、この年で山小屋を建てて畑仕事を始めるきっかけとなった。以来、毎年20種類ほどの野菜を作っている。診療を終えてから山小屋に行き、BBQの後泊まり込んで、夜明けとともに畑仕事を始める。そして、もぎたてのトマトときゅうりで作ったサンドイッチをほおばり、シャワーを浴びてから出勤する。

ちょうど、その頃、医師会の大学区理事を拝命し、開業医の先生方との交流が始まった。理事会の討議内容はチンプンカンプンだったが、酒を呑むと面白い先生方がズラリ。執行委員の一人に、古府で開業している鯛釣り名人の北川先生がおられた。宴会の席で「センセー、私も鯛釣りに連れてってよ」「おー、行くか！」それが始まり。ピギナーズラックで大きな鯛が8枚も釣れた。これで、ハマってしまう。そのうち、プレジャーボートを

買って海面を爆走し、朝からビールを飲みながら、たまにしか釣れない大鯛を狙うようになった。深瀬釣りは糸を流している間、数分の余裕があるので、ビールがうまい。

70歳を過ぎ、残り人生もあとわずか。終には、立山連峰と富山湾を臨む九十九湾の高台にドイツ製のキャンピングトレーラを海小屋として設置した。その心は、前の晩に泊まって夜明け前の出航に備えるため。山小屋と海小屋。それに、診療と論文書き。当然のことながら、体がいくつあっても足りない。しかも、山には山のプロ、海には海のプロがいて、所詮、自分は素人でしかない。干支を6周して、やっとこのことを悟った。でも、好きなことをして食ってゆけるのが、人生最大の幸せ。診療の合間に2つの小屋で思い切り遊んで、お迎えが来る前の日まで論文を書き続けよう！



海小屋ではしゃぐ孫たち